

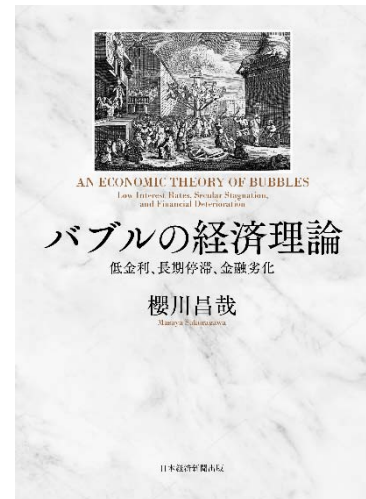
受賞作品

## バブルの経済理論

—低金利、長期停滞、金融劣化

櫻川 昌哉 著

日経 BP 日本経済新聞出版 504 ページ、4,500 円（税別）



書評

## 独自の視点でバブル研究

東京大学教授 福田 慎一

本書は、バブルの理論を使って、株価や地価といったリスク資産の高騰と下落から、国債など安全資産の金利低下に至るまで包括的に論じた大著である。過去数十年間に発生したバブルを「利子率が経済成長率よりも低い世界では合理的バブルが発生する」との考え方にに基づき独自の視点からまとめた研究書といえる。

1980年代後半の日本の不動産バブル、リーマン・ショックの引き金になった米国の証券化バブル、近年の長期停滞下での国債バブルなど、幅広いテーマを取り扱っており、関連分野に興味のある一般読者にも有益である。金融市場が不完全である場合、経済の好況期に発生する株価や地価のバブルと、停滞期に発生する国債のバブルは、同じ理論で整合的に説明できるとする著者のアプローチはユニークである。

もっとも、バブルを生む他の複合的な要因が十分に議論されていないうらみもある。好況期に発生するバブルは多分に「根拠なき熱狂」によってもたらされた面がある。他方、停滞期の国債バブルは、金融市場以外の様々な構造的問題に影響を受けている。これらの複合的なメカニズムを含めてもう少し丁寧な説明がなされていれば、議論の説得力が増したと思われる。

それでも全体を通じて現在の日本経済が抱える問題に独自の視点から深く切り込んでおり、力作として高く評価できる。